横須賀商工会議所
# 産農人
さんのうじん

新時代の農業人育成プロジェクト

2021年3月　第8号

■発行：横須賀商工会議所
横須賀市平成町2－14－4　☎046・823・0421
■編集：㈱タウンニュース社　横須賀編集室

横須賀商工会議所
6次産業化を応援！

■「産農人」とは農作物をつくるだけでなく、市場ニーズを理解し流通させることのできるマーケットセンスを持った新しい農業人を表す造語。横須賀商工会議所と地域の農家・加工業者・飲食店・メーカーが一丸となって、将来の農業を担う有用な人材の育成に取り組んでいます

「産農人」3期生

# 農業支える人づくり 歩みは着々

新時代の農業人を育成する「産農人」プロジェクトは、今期6人のメンバーで活動中。
作物の生産や加工食品の開発をテーマに、学校の枠を飛び越えた実践型研修を行なっている

三浦初声高校都市農業科の生徒6人が参加する「産農人育成プロジェクト」の活動報告会が2月25日、横須賀商工会議所で開かれた。3期目となった今年はコロナ禍で活動を大きく制限されたが、生徒らは目標を見失わず、できることに挑んだ1年間を振り返った。

## 卒業後は農業・食品の分野に

「産農人」は、農業を志す高校生に実践の場を提供して、戦略的な農業経営を学んでもらう試み。横須賀商工会議所を主体に、若手農家、地元飲食店、食品大手のカゴメがチームを組んで学びの場を提供している。

「攻めの農業」を標榜。6次産業を加速化させるために農業と食品加工の両分野に通じた人材の育成を行っている。

ただ今年は新型コロナの影響を受け、活動開始が7月と出遅れた。農作物の生産―加工―流通販売まで一連の過程を学ぶプログラムをすべてこなすことが難しくなったため、農作業班と食品加工班の二手に分かれ、各人が興味関心のある分野を深めていった。農作業班が生産したバターナッツかぼちゃを食品加工班に提供し、これを用いたデザートメニューを開発。実際の商品として店頭販売も行い、「産農人」の活動を一歩前に進めた。

今期卒業する3年生は4人。長島未歩さんは栄養士をめざして専門学校に進学。実家のイチゴ農家を手伝いながら加工品開発に挑む。シュト コウチニョ ケンジさんは沖縄に移住してマンゴー農園に勤務。食品加工に興味を寄せる佐藤藍音さんと就農を希望する秋元琉椰さんは「産農人」アドバイザーのもとに就職。今後は後輩の指導役となって「産農人」の活動をサポートしていく。

3期生メンバーとアドバイザー。収穫したカブを手にして

《横須賀商工会議所 菊池匡文専務理事の話》

「産農人」の狙いは、農業の成長産業化と担い手となる人づくり。来年度は、県の協力も得ながら人材の受け入れ体制の構築や農地の確保などこれまでの活動をスケールアップさせる考え。農業で起業できる下地づくりを行っていく。

## 生徒の成長を間近で見る喜び――八重樫 恵里教諭（県立三浦初声高校）

「産農人」の活動に参加する生徒らの〝伴走者〟となって1年間共に過ごしてきた。

「つくる」だけの農業ではなく、市場分析や加工食品の開発など、新しい時代の農業人の育成をめざす産学連携の取り組みは斬新かつ画期的。現場の一線で活躍している生産者、飲食店経営者、食品メーカー社員だからこその説得力が学びの幅の広さと深さに繋がっていることを実感した。学校の枠を越えた「産農人」のプログラムに、生徒たちの意欲を引き出す新しいキャリア教育の可能性も感じたという。

特に卒業を間近に控える3年生4人の意識と行動の変化には、目を見張るものがあった。彼ら（彼女ら）が農業に対して抱いていた漠然としたイメージは、活動を通じてどんどん明確化していった。「それぞれが進みたい分野や学びたい領域を見つけて、新しい道を歩もうとしています」。

自分の考えていることを、うまく言葉で表現できなかった生徒が人前で堂々と発表できるようになったことも大きな収穫だ。「多くの大人たちと関わる経験が役に立ち、自信を得たように思えます」。その成長ぶりに驚かされるとともにたくましさを感じている。